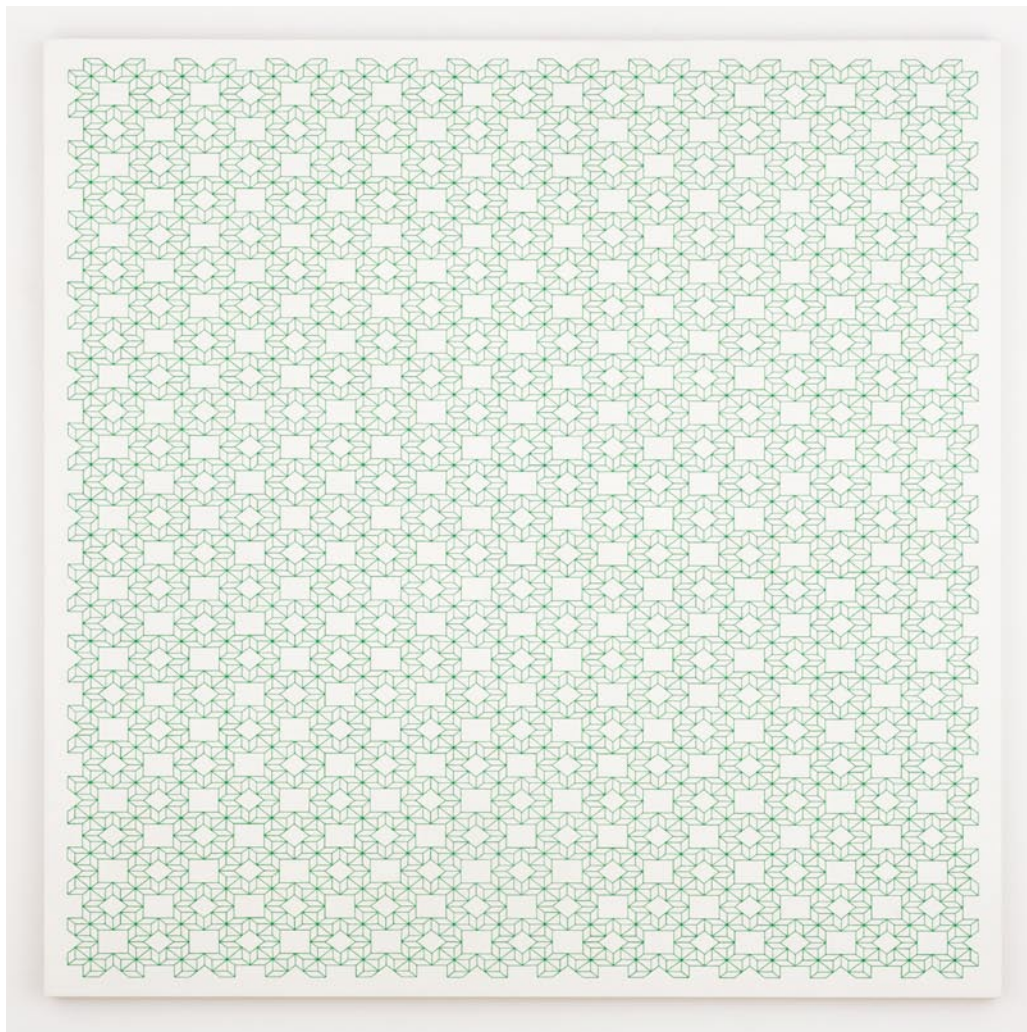


名古屋 文化 情報

2013
9・10
September / October

No. 352
NAGOYA
Cultural
Information

随想／西川 千雅（日本舞踊家） 視点／国際芸術祭
この人と／松本 喜臣（演出家・俳優） いとのサブカル／小松 史生子（金城学院大学教授）



2013

9・10

September / October

Contents

名古屋市民文芸祭 受賞作品…………… 2

随想 名古屋だからこそ… 西川千雅(日本舞踊家)… 3

視点 都市と市民を覚醒させる国際芸術祭…………… 4

この人と…

松本喜臣(劇団シアター・ウィークエンド代表、演出家、俳優)… 6

ピックアップ…………… 10

いとしのサブカル 小松史生子…………… 11

おしらせ…………… 12

「なごや文化情報」編集委員

- 倉知外子 (オクダ モダン ダンスクラスター副代表)
- 酒井晶代 (愛知淑徳大学メディアプロデュース学部教授)
- 田中由紀子 (美術批評/ライター)
- はせひろいち (劇作家・演出家)
- 米田真理 (朝日大学経営学部准教授)
- 渡邊 康 (椋山女学園大学教育学部准教授)

表紙

作品

「S120 -2」

(2012年/麻布に油彩・卵テンペラ/194×194cm)

この作品はキャンバスの布目に沿って筆を使いフリーハンドで、できるだけ均一なラインを目指し描いています。その結果、ラインには小さな揺らぎが非意図的に残ります。私はこの非意図的に残ってしまう小さな揺らぎの中に美の秘密があると思えるのです。

額田宣彦(めかたのぶひこ)

- 1963年 大阪府生まれ
- 1990年 愛知県立芸術大学大学院美術研究科修了
- 1999～ 2000年 ポーラ美術振興財団助成によりロンドン滞在
- 2009年 「放課後の原っぱ」愛知県美術館、名古屋市美術館
- 2013年 個展「定常Ⅱ」 ギャラリー東京ユマニテ(東京)
- 現在 愛知県立芸術大学美術学部油画専攻准教授

「二〇一二年 名古屋市民文芸祭」
 (第六三回名古屋短詩型文学祭)小・中学生の部
 川柳の部受賞作品より

※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市長賞◆
 家族はね支えてくれる宝物

名古屋市立今池中学校二年
 花木優登

◆市会議長賞◆
 ありがとうまほうの言葉すてきたな

椋山女学園大学附属小学校四年
 鈴木まりあ

◆市教育委員会賞◆
 友情の炎はいつも灯ってる

名古屋市立有松中学校二年
 加藤 瞳

◆市文化振興事業団賞◆
 えんぴつのうれしい時はきれいな字

東海市立加木屋南小学校六年
 日下 桃花

◆名古屋短詩型文学連盟賞◆
 どうぶつのいのちはみんなあったかい

椋山女学園大学附属小学校二年
 水谷 みう

◆中日賞◆
 がんばって汗をかいたらさわやかだ

東海市立明倫小学校五年
 若杉 悠也

随想

名古屋だからこそ…



にしかわ かずまさ

西川 千雅(日本舞踊家)

西川流では毎年9月に「名古屋をどり」という長期公演を行っています。日本舞踊が長期公演を行うことは異例で、一流派の公演としては日本でも唯一のもので。この公演がはじまったのは昭和20年秋。第1回公演の内容を見ると「釣女」という喜劇、「お夏狂乱」という悲劇、そして民謡集でした。焼け野原の中、終戦1ヶ月後に行われた公演ですから、今はなき納屋橋の名宝劇場で、なんとか組み上げた小さな3日間の興行でしたが、超満員になったそうです。

日本舞踊は伝統芸能と言われますが、昭和の中頃まではかなりポピュラーな芸能でした。女優も着物姿や日舞は必須の教養、先代家元・西川鯉三郎も山本富士子さんや佐久間良子さん、美空ひばりさんなど多くのスターを振り付け、宝塚ほか商業劇場にも、和ものはたくさんとりあげられました。それゆえに、“伝統”というには少し派手な印象があったのだと思います。

現在もそういった文化は残っていますが、昔とはちょっとニュアンスが違うと思います。新しい世代は、完全に江戸文化とは分離した生活を送っており、自分にとっては新しく出会う「昔ながらのもの」というジャンルのものとして出会っています。それは「今を生きる歴史あるもの」とは違います。例えば寿司は江戸時代から歴史があり、ポピュラーな

ネタはマグロだったり、ネギトロだったりしますが、それらは江戸時代にはないのです。江戸時代の主流はツケやコハダ…今の回転寿司は伝統派からすれば“寿司じゃない”となるでしょう。

また、20年前留学していたころ、アメリカのニュースでこういうものがありました。デューク・エリントンの孫が“ジャズ”というのは自分の祖父が作ったもので、それ以降のジャズはジャズではない…。モダンやバップやフュージョンはジャズじゃない、という声明を出した、というものです。“なんと馬鹿な声明を出すもんだ”というニュアンスで、このニュースは紹介されていましたが、伝統を守ろうとすればその気持ちもよくわかります。

今年の名古屋をどりで紹介される新作「御神木雷乃由来」は“フォークの神様”岡林信康さんが作った、新しい日本のフォーク“エンヤトット”で上演されます。三味線、笛、太鼓を使い、民謡のリズムを借りながら、歌はわかりやすいフォークソングです。西川右近の台本の言葉が、現代人の耳にも入るように、わかりやすく歌っています。これは、視点によっては日本舞踊ではないでしょう。でも現代に生きる舞台で、そのルーツは伝統にあります。

不易流行…、名古屋の西川流は、そうやって時代を生きてきました。

都市と市民を覚醒させる国際芸術祭

あいちトリエンナーレ2013が8月10日に開幕した。愛知芸術文化センター、名古屋市美術館、長者町・納屋橋・岡崎のまちなかで、10月27日まで開催される。「揺れる大地—われわれはどこに立っているのか・場所、記憶、そして復活」というテーマが、芸術監督やプロデューサー、参加アーティストにどう解釈され、展示や公演に具現化されているかを紹介する。(まとめ/田中由紀子)

「都市の祝祭」から「揺れる大地」へ

2010年に引き続き、2回目の開催となるあいちトリエンナーレ2013。今回のテーマは「私自身も被災し、東日本大震災以降のアートと建築がどういった表現を成しうるかを考えたかった」という芸術監督の五十嵐太郎の思いから設定された。「都市の祝祭」をテーマに、アートのおもしろさや楽しさを全面に打ち出した前回とは一転し、これまでの世界観や自然観がもはや通用しない現代という時代や社会をどう捉え、どう生きていくかを来場者に提案し、共に考えていくための展示や公演、プログラムが展開されている。

テーマとじっくり向き合える国際美術展

国内外から76組のアーティストが参加する国際美術展には、テーマと真摯に向き合える作品が並ぶ。

愛知芸術文化センターでは、仙台を拠点に活動し、1990年代から漂流してきた壊れた物を修復して作品化してきた青野文昭が、同様の手法による大型の作品を発表しているほか、気仙沼のリアス・アーク美術館が、震災直後から撮影された写真や被災地で収集された被災物などの膨大な震災の記録を、どのように展示し、次世代に伝えていくかを提案。また、ベルリンを拠点とするニナ・フィッシャー&マロアン・エル・サニは、福島から愛知に転入してきた被災者のインタビューに加え、ピキニ環礁沖水爆実験を受けて黒澤明監督が制作した映画「生きものの記録」(1955年)をもとに、一般の参加者とワークショップを行って制作した映像作品を展示している。

名古屋市美術館では、ニューヨークで活動するアルフレッド・ジャーが、津波の被害により閉校となった石巻の学校から譲り受けた黒板を使



アルフレッド・ジャー「黒板プロジェクト」2013 © Alfredo Jaar

って、メモリアル的なインスタレーションを展開しているのも見どころだ。

岡崎が加わり、充実のまちなか展開

長者町会場では、奈良美智とその仲間による「THE WE-LOWS」が空きビルを改装してカフェ空間をつくり、そこで展示やライブを行う。青森出身で栃木在住の奈良は「震災では栃木も揺れたし、青森に帰る時には福島や岩手を通るのでショックだったが、その時、真っ先に考えたのは、これまで密に接していた人々との関係だった。学生時代の7年間を過ごした愛知でのトリエンナーレに参加する意味と、東北出身であることをどうつなげるか考えた時、家族や仲間が集い、その関係をさらに密にする空間をつくれなかつたかと思った」という。震災後に母校である愛知県立芸術大学に半年間レジデンスし、そこで知り合った仲間と、カフェやギャラリーを備えた空間をつくった。

今回、新たに会場となった岡崎では、前回に引き続いての参加となる志賀理江子が展示。宮城在住で自身も被災した志賀は、せんだいメディアテークでの個展「螺旋海岸」で発表した、震災後に初めて制作した大型写真によるインスタレーションを、出身地である岡崎の会場に合わせて再構成を試みた。

また、オノ・ヨーコは震災後の日本に向けたメッセージとして《生きる喜び》という言葉、テレビ塔ほか数か所にネオンサインで掲出している。復活をテーマにした

彼女のメッセージは、街行く人々にダイレクトに響いていることだろう。



志賀理江子「螺旋海岸」2012-2013
せんだいメディアテークでの展示風景
courtesy of the artist

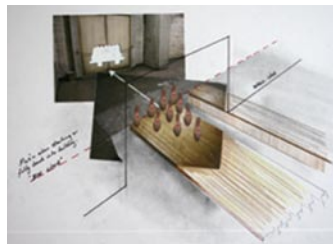
建築的な視点を随所に導入

展示の随所に建築的な視点が盛り込まれているのも、今回の特徴といえる。なかでも名古屋市美術館は、建築家の青木淳による新しい解釈で、動線や空間の再構築がなされた。「震災以降、同レベルの地震がいつ起きても不思議ではない場所で、自分は生きているのだと実感するようになった。いつも見ているものが、いつ違って見えるかもしれない。だから今回のトリエンナーレでは、普段の見え方とは異なる見え方を提案できないかと考えた」という青木。通常は閉鎖されている美術館の南側の入口を起点に動線を組み換えることにより、展示する参加アーティストと対話しながら、黒川紀章設計の名古屋市美術館を読みかえるという試みに挑戦した。

阪神淡路大震災で全壊判定を受けた実家を修復・補強した《ゼンカイハウス》で知られる建築家の宮本佳明は、愛知芸術文化センターの壁や床に 1/1 スケールの福島原発の建屋の図面をカットニングシートで貼り、福島原発の大きさを体感させる。リチャード・ウィルソンはもともと建物に大胆に介入する作品で知られるが、納屋橋会場の建物がかつてはボウリング場であり、床下にボウリングレーンが残っていたことから、レーンが建物の外壁から出たり入ったり平行移動する作品を制作。場所が持つ記憶を顕在化させている。



宮本佳明《福島第一さかえ原発》2013 ©宮本佳明



リチャード・ウィルソン Plan drawing for (Lane 61), 2013

パフォーマンスアーツはベケットが肝

パフォーマンスアーツでは、国内外から選ばれた 15 組の作品が上演される。プログラム編成の特徴は、最先端の演劇、ダンス、音楽であること、舞台芸術と視覚美術を架橋する作品であること、今回のテーマがサミュエル・ベケットの世界観と大きく通じるところから、ベケット的な作品であることだという。

「人間とは? 生きることは? について思いを巡らしたベケットの作品は、われわれが立っている場所を見直すためにふさわしいと考えた」というのは、パフォーマンスアーツ統括プロデューサーの小崎哲哉。

そんな小崎の思いを受け止め、世界最高峰の振付家であるイリ・キリアンは、ベケットの「……雲のように……」から着想した新作《East Shadow》を制作。アルチュール・ノジエールによる、ベケットの同名小説の朗読をコアにしたダンスパフォーマンス《L'IMAGE》は、日本初演となる。

また、美術家でもあるやなぎみわは、ベケットの戯曲「クラブの最後のテープ」を織り込んだ「ゼロ・アワー 東京ローズ最後のテープ」を上演。ARICA+金氏徹平による「しあわせな日々」はベケットの代表作の一つで、小山のような舞台美術に女優が終始埋まったまましゃべり続けるのが特徴だが、この舞台美術を制作するのが美術家の金氏であり、「ゼロ・アワー〜」と同様に視覚美術と舞台芸術を横断する作品といえる。

さらに、岡崎シビコで展開される、向井山明子+ジャン・カルマンによる《FALLING》は、ベケットの「いざ最悪の方へ」にインスパイアされたパフォーマンス/インスタレーションで、小崎によれば「大人のための知的なお化け屋敷」というべき作品だという。



やなぎみわ「ゼロ・アワー 東京ローズ最後のテープ」
photo: 木村三晴

2013 ならではの展開にも注目

『あいち建築ガイド』の発行やオープンアーキテクチャー、モバイル・トリエンナーレなど、今回からの取り組みも盛りだくさん。『あいち建築ガイド』では、県内の約 155 件の建築物を紹介。オープンアーキテクチャーでは、普段は公開されていない建物 14 か所を、ガイドツアー形式で専門家と巡る。個人住宅も紹介されるが、川合健二設計のコルゲートハウスは従来の概念を打ち破った実験的な住宅で、今回の目玉となっている。また、会期中の週末を中心に、豊橋市、知多市、春日井市、東栄町に参加アーティストの作品 25 点程度を巡回展示するモバイル・トリエンナーレも新たな試みで、より多くの人々に現代アートに触れる機会を提供している。

さらに、会期中の週末を中心に、参加作家によるトークやディスカッション、喫茶店文化や結婚式など愛知の文化や特性に迫るレクチャーなど、「パブリック・プログラム」の充実ぶりも今回の特徴。展示作品や参加アーティストへより深くアプローチすることにより、来場者の考え方の広がりや変化を促し、アートと社会の関係を考える機会の提供を目指している。

今回のトリエンナーレは、テーマから震災のことばかりが考えられがちだが、テーマを英訳した“Awakening - Where Are We Standing? - Earth, Memory and Resurrection”の“Awakening”は「覚醒させる」という意味である。アートをとおして、いま私たちが生きている世界を見つめ、今後どう生きていくべきかを考える絶好の機会となるのではないだろうか。

この人と...



劇団シアター・ウィークエンド代表、演出家、俳優

松本 喜臣さん

多彩な顔、その根っこに「芝居への情熱」

名古屋を代表する老舗劇団「シアター・ウィークエンド」は今年で40周年を迎えた。劇団代表である松本喜臣氏は、大学講師をはじめカルチャーセンターや養成所で演劇を教えつつ、公演の演出を担いながら自らも舞台に立っている。かつてラジオパーソナリティーとして「名古屋の朝の顔」を15年務め、懐かしのTV映像の中では名パイプレイヤーとして顔を出す松本さん。泥臭さを売り物にする小劇場文化とは、一見不似合いなジェントルでスマートな仕事ぶり。その根底に流れる「熱き思い」を取材した。

(聞き手:はせひろいち)

父がスタジオを経営し、母は居酒屋を

取材で伺った劇団シアター・ウィークエンドのアトリエは、池下駅に近い便利な立地。小さな空間に、芝居をするための細やかな気配りと工夫がグッと詰まった、楽しい自由空間だ。迎えてくれた松本さんはスーツ姿。やはり小屋との違和感を禁じえず、取材意欲が高まる。

「今ではビルが林立する名駅の東側界隈を遊び場に使っていた腕白な少年でしたね」と話す松本さん。「生粋の名古屋っ子」でもある松本さんは1940（昭和15）年生まれ。少年時代の多くを名駅から徒歩数分の、広小路通沿いの実家で過ごした。「まさに街頭のテレビで力道山の試合をやった時代でね」と懐かしそうな笑顔で振り返る松本さん。松本少年が物心つくとき、ご両親はバレエ、ピアノ、ヴァイオリン、声楽、水泳を習わせた。「平泳ぎなら今でも死ぬまで泳ぎ続けられる」という松本さんだが、次男と三男にはスポーツしか勧めてないらしく、ご両親はいち早く、松本少年の芸術志向を見抜いていらしたのかもしれない。6歳で子ども劇団に入り翌年には時代劇で初舞台を経験している。「親は決して強制的でなく、いつやめても良いよってスタンスだったけど、あの頃に僕は耳、すなわち音感とリズム

感の基礎を学んだ気がする。感謝してますね」と松本さん。こう聞くと、戦後間もなくからの、ある種の英才教育とも思うが「いやいや、決して裕福な家ではなく、親父は社交ダンスのスタジオを細々と営んで、それだけでは暮らせないから、お袋は夜に小さな居酒屋をやっていた」と松本さん。思えばレッスンスタジオと酒場。いずれも芝居人には欠かせないアイテムだ。「確かに小学校から帰るとグレン・ミラーの音楽に迎えられ、夜は酔っぱらいの生態を観察してましたからね。人生勉強としての何かしらは、子どもの頃から育てていたのかも知れません」と振り返る。



1941年 0歳の松本さん 鶴舞公園にて

小津映画に憧れ早稲田の演劇学科に

「高校時代は映画一色でしたね。洋モノや黒澤明もいっぱい観たけど、一番はまったのが小津安二郎。高校2年で明確に映画監督志望だった」と松本さん。その夢に一直線とばかり早稲田の文学部演劇学科に見事に合格する。そして、受かった勢い、友人たちとスキー旅行中のゲレンデで、その日がもう一つの志望校、日大の映画学科の試験日だったことを思い出す。「自分でも呆れたけど、今更したばたしても仕方ない。友人と大笑いしながら『人生はあみだくじ』だと実感した」。この松本流『人生あみだくじ論』の説明は後に譲るとして、それでも松本青年の夢は学生時代にもブレず、卒論は『映画におけるファースト&ラストシーンについて』だった。そしていざ就職を、と世間を見渡し松本さんは愕然とする。

高度成長期真っ只中の日本、早稲田卒に引く手は数多かったが、松本さんが目指す映画界に限って、折からのテレビ文化台頭の勢いに負けて一気に下火。目指す松竹をはじめ希望する全6社が「求人なし」だったのだ。松本さんが今という就職浪人をして小津組を狙おうかと思っている時、後に名誉教授にまでなる安堂信也氏から講義の際に「文学座が研究生を募集してるから1年ぐらい俳優の勉強でもしてみたらどうか」と勧められる。子役経験もある松本さんは、気軽に応募。かなりの高倍率のなか見事に受かる。「同期が夏八木勲、黒柳徹子、そして江守徹かな。早稲田からも10人ほど受験したけど受かったのは僕を含め2人だけだった」と松本さん。超有名な大御所の名前がてらいなくスラスラ出てくるのも松本さんならでは。実はこのもう一人の早稲田からの合格者が、松本さんの奥さんであられる劇作家の東田麻希さんだった。「つまり冷やかし半分の2人が通ったのね。きっとギラギラしてなかったからかな？ 同級生の斉藤晴彦は落ちてた」と思い出は尽きない。「当時の文学座は猛者揃い。江守はやっば上手くてさあ。たまたま同じ役を振られた時なんか、黒柳徹子さんや長岡輝子さんたちも、江守ばかり褒めるんだよなあ」と松本さん。「まあ、でもやっば上手かった。今でも御園座なんかに来ると楽屋に行くけど、やっば当時から目標だった」と振り返る顔は役者のそれである。

TV文化の台頭と舞台へのこだわり

「映画はね、死ぬまでに一本は撮りたい。密かな夢だね」と話す松本さんだが、この文学座研究生の間にどっぷり芝居の世界にのめり込んでいったのは自他ともに認めるところ。研究生を卒業後も先輩同志たちと「波の会」を立ち上げ数々の舞台に立つ。2年後に方向性の違いから解散した後は、「劇団新劇場」に参加。田口計や麻生美代子らとの共演を重ねた。このころ舞台を観てくれた演出家の中に、後の直



『波の会』時代 アラバール「ファンとリス」の舞台 左が松本さん

木賞作家、当時は松竹の敏腕監督だった高橋治がいて、松本さんをTVドラマに抜擢する。「あの頃はテレビも16ミリのフィルムで撮ってましてね。高橋さんは『仇討』っていう作品の隠れキリシタン役の主役をくれた」と松本さん。これが縁であの有名な「ザ・ガードマン」や「七人の刑事」などにたびたび呼ばれるようになる。「いわゆるメインゲストって奴ですね。美味しい見せ場も多かったけど、所詮は犯人でしょ。殺されたり捕まったりするから、毎回って訳にもいかない。都合5〜6本かな」。だが、松本さんの意識の重心はあくまで舞台。共演者がテレビの仕事で舞台稽古を休むことが横行すると、劇団の総会で「ここは劇団でしょ？ 舞台が一番ではないのか!」と語気を荒げて発言もした。「大先輩相手に吠えましたね。まあ若気の至りなんだけど、同時に、実はそうやってテレビで稼がないと劇団が成り立っていかない、っていう悲しい事情も判っていて…」と松本さん。マスコミと舞台の不自由な力関係、そして大都市における舞台俳優の存在の小ささ。後に名古屋で劇団と劇場を立ち上げる松本さんを取り巻く、一つの環境がココにあった。



記念すべき『ウルトラマン 第1話』にも松本青年の姿が(左)

演劇観を変えた初の海外巡業参加

松本さんが東京を離れる決心をした、もう一つの具体的なきっかけ。それが1972年、東欧諸国をめぐる海外巡業公演に役者として参加したことだった。「1人30万用意してくれ」との演出家の話に、当時既に結婚し1歳の長男がいた松本さんに、苦言を言わず資金的にも協力してくれたのが妻の東田さんだった。「今でも感謝してますね。なにせ自分でも、あの旅が後々の人生にこんなに栄養素になるとは思っていませんでしたから」と松本さん。連日地元新聞を賑わす公演の成果もちろん、東欧の観客、街並み、生活ぶり等々、全てが松本さんを刺激していった。ウィーンに入った時、「タクシーが皆ベントツなのも市民が本当の自由主義を謳歌しているのも、全てが驚きだった。まさに『西側の夜なおアンバーに明るい街』を満喫していた」。巡業公演を終えた後も、気の合う5人のメンバーと現地に残り、貧しいオプションツアー。コンベンションホテルが満杯で、新聞紙を体に巻いて野宿した夜もあった。さらには仲間とも別れて単身、ローマ、ナポリ、カンヌ等々、一か月で数多くの都市を巡った。そして帰国間際のパリで、松本さんの思い付きは、また一つ「あみだくじ」の選択肢に一本の線を加えた。たまたまその時パリ在住だった瀬戸市出身で文学座演出家の加藤新吉氏を訪ねた松本さんは、開口一番「先生、今パリで一番の芝居は何ですか?」と聞き出し、加藤氏は迷わず『1789』と告げた。『1789』とはテアトロ・デュ・ソレイユがフランス革命を下敷きに作り出した前衛的な群集劇で、やがて世界的な評価を得、日本でも2002年に来日公演を行っている。これを当時、しかも現地で日本人が観劇すること自体が奇跡的であり、この出会いが松本さんの芝居観を大いに変えていった。「何せ観客は本当の旧陸軍弾薬倉庫に集められ、客席もなし。3カ所の離れた舞台上で、次々とシーンが演じられ、客は勝手に移動してそれを見るのね。やがて観客は、自分たちもまたパリ市民としての役割を与えられていたことに気づくんです」と、今なお目を輝かせて語る松本さん。舞台が放つ圧倒的な熱量を再確認し、同時に芝居はかくも自由なのかと驚いた。「初の海外、貧しい旅の中で行動力にも自信がついたし、街中で見かけた小さな『演劇カフェ』や『シャンソン喫茶』も気になった。つまり生活と文化の関わりを真剣に考えるようになった。それに『1789』の衝撃も加わって、帰国の途では、少しずつ『劇場を持ちたい』って思い始めてましたね」。

自分の聖地を構え充実の活動

帰国した翌年、松本さんは名古屋にて「劇団シアター・ウィークエンド」を結成、翌々年には拠点劇場「座・ウィークエンド」を今池・都通りに開設した。「もちろん東京でも不動

産屋をしらみつぶしに探したけど、どう転んでも3,000万は下回らなかった。今だから話すけど、名古屋でも親や親類に土下座して1,000万円借りて始めたコトだった」と松本さん。劇団にも劇場にも名づけられたウィークエンドの言葉には、週末ごとに気楽に足が向く芝居の場、すなわち松本さんが目指した、生活と演劇が自然に調和しあえる『演劇カフェ』のイメージが込められている。「開設当初は平気で年に4本5本と打っていた。劇場がたまたま1階だったから、舞台に本当の自動車を突っ込んだりしてね」。後に声優デビューし全国的な人気を博す小山茉美がウィークエンドに在籍していたのもこの時代。「彼女は実はウチを『劇団青俳』と間違えて入ってきたのね。ウチもアラバールとかやってたから」と楽しそうに話す松本さん。「でもウチで頑張ってたのがきっかけでラジオドラマの主役が来てデビュー。その相手が結婚した古谷徹だった。横浜の結婚式にも出席したなあ」。普通ならとっておきの自慢話なのだが、松本さんは実にさりりと思い出の1ページのように話すのだ。



1997年の『音吉物語』シアトル公演より



同公演の楽屋風景 左は松本さんの東欧巡演以来の友人、故奥村公延氏

「人生あみだくじ」と「柳に風」

「とにかく劇団を始めてからは、他のどんな仕事でも行くのが嫌だと思ったことが一度もないんだよね」と話す松本さん。15年続いたFM愛知のパーソナリティーも、最初こそ真面目にすべての原稿を手書きしてたが、次第に相手の女子アナとの会話を重んじ、自分らしく振る舞うようにしてからそれなりに楽しめるようになったという。このある意味自然体のバランスの良さは、松本さんの仕事ぶりを考える上で、一つの大きな特徴なのだろう。よく口にされる「人生あみだくじ」のポリシーは、何が当たりクジだったかは死ぬまでわからない、という楽天的な要素をはらみつつ、だからこそ、人生の出会いや分岐点に立った時「くよくよ考え悩んでいても仕方ない」というある種の潔さも含んでいる。東京でのマスコミを含めた活動から「所詮食えなきゃ仕方ない」コトを十分実感したうえで、欧州歴訪で体感した「舞台芸術はどこでも成立する」というある種グローバルな感覚を、自分の活動の根っこにバランス良く据えている。そこに余裕を感じるのだ。「立場上、俳優協会とか放芸協とかにも参加していますが、実は組織の長にならないよう、意識的に距離は取ってます。いつまでもフットワークよくいたい。死ぬまでベテランではなくガキっぽく、熱っぽくいたいんですよ」と松本さん。ご自身が「柳に風」と評する自由さは、そんな舞台への情熱に揺るぎなく支えられている。

名古屋を拠点にグローバルな活動

1986年に劇場を今の池下・大崎ビルに移してからも東田麻希作、松本喜臣演出のタッグは次々と作品を世に出し、特に劇団創立20周年に上演された『にっぽん音吉物語』は、音吉ゆかりの美浜町、春日町、シンガポールでも上演され、その後も1997年シアトル、2001年ロンドン、2008年ハワイでも上演されている。また1999年には東京・中野に第2の拠点劇場『Studio twi』を開設。こちらは今や若手芸人の登竜門的場所として有名になり、マギー審司や青木さやか、品川庄司らを輩出している。「海外公演は、何より若い劇団員にかけがえのない経験をさせてあげたかった。劇場運営に関しては、池下にしろ中野にしろ、ほら、僕らは表現の場がなかった時代を知ってるからね。大劇場では出来ない若い演劇人にもエールを送り続けたいし、それが演劇の根っこを潰させないコトだと思う」と松本さん。ご自身が若い頃、都会で海外で感じた思いを、そのまま今の表現者に伝えようとする、静かな熱意がそこにある。「最近、ウチを使ってくれる集団を見ると、お行儀が良いと言うか、大人しくてまともはあるんだけど、反面それでいいのか?とも思う。若さゆえの開き直りとか『やけくそさ』が欲しい。なんて言い



2005年『歌留多』の舞台から 千種文化小劇場

ながら、威勢のいい若手が劇団に入ってくると、一番燃えるのは俳優としての僕なんだけど」と笑う。

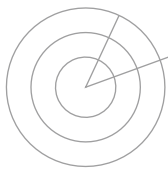
40年変わらないのは舞台への熱

そして今年で劇団創立40周年。「あっという間だった」と言う松本さんだが、昨年末からの記念公演は全部で5作品。『音吉物語』『Az~ to be continued ~』に続き6月には新作『明日元気になあれ!』、8月の『霊界・T・ステーション』を経て、12月には『流・流~時は流れて~』を上演する。演出をし、俳優としても出演する松本さんは、大学での講義や養成所での後進育成の仕事の中、実に多忙な記念の年を、むしろ楽しんでいるようにも見える。「やっぱ最後は『熱』なんですね。演出として舞台を作るときも、俳優として舞台に立つときも、僕が一番心がけてきたのはコレだった。舞台と客席、すなわち劇場全体が『熱』で覆われるような、演劇本来の姿を、今までもこれからも求め続けていきたい」との弁。10年前に胃を3分の2摘出する手術を受けた松本さん。「自分の体がすべてを動かしていることを再確認し、むしろ今の方が健康です」との言葉からも、この40周年はただの通過点であり、松本さんの『あみだくじ』には、まだまだ新しい出会いと分岐点が待ち構えている気がした。



今年6月の40周年記念公演第3弾『明日元気になあれ!』より

ピックアップ



あいちトリエンナーレ「祝祭ウィーク」 コンサートホールで音楽と舞踊のコラボレーション

あいちトリエンナーレ2013では「祝祭ウィーク」を設け、地元の文化団体などとの共催で舞台事業を実施し、音楽、舞踊などの14公演が開催される。その中の2公演は企画性に共通点が2点あり、関心をいだき取材をした。その1つは音楽家と舞踊家が手を組んでいる点。9月30日の「NEXT」くりもとようこ&野々村明子、10月2日のGroupe Créatif K~Kae KURACHI & Tamami KODAMAの2団体。2つ目は愛知県芸術劇場コンサートホールを会場とし、音楽に限らない新鮮な空間を生み出したいと企画していること。作者は各々に独自性ある個性溢れる作品を発表し続けている。

まず、「NEXT」くりもとようこ&野々村明子主催・企画・構成の「静かなる大地」は、出演者を60歳以上とし、一般市民から公募（経験や分野を問わず）、48名が参加し、舞踊家や音楽家も参加する。トリエンナーレの総合テーマ「揺れる大地」に対して「静かなる大地」のテーマは「沈みゆく夕日と一緒に眺めてみませんか？…かすかな音に耳を澄ますことがありますか？」との問いかけである。「現代社会の追いつけられないような騒々しい風景のなかで黙って立ち止まり、幸福な空間と時を感じてほしいし、その仕掛けを試みたい。公募に応じた参加者が各々の生きた人生を投影して存在し何かが表出される可能性を

引き出したい」と2人は語った。主にくりもと氏が作・演出し野々村氏がダンサーも兼ねる。一方、Groupe Créatif K~Kae KURACHI &



くりもとようこ氏(左)と野々村明子氏(右)

Tamami KODAMAは構成・台本：児玉たまみ、構成・振付：倉知可英で「光の記憶第二章~KAGUYA~」にて、現代人として独自の解釈で竹取



倉知可英氏(左)と児玉たまみ氏(右)

物語に挑戦する。満ち欠けを繰り返す月への想い、揺れる心、日本人が持つ循環と再生の思想などを音楽・舞踊・言葉による総合的な表現で現代にも通じる普遍的なものを掘り、7人の多様なアーティスト達で創造する。その7人は日本画の平松礼二氏、日本舞踊の西川千雅氏、コンテンポラリーダンスの池田遼氏と倉知氏、ヴァイオリンの高橋誠氏、箏の笹野大栄氏、ヴォイスの児玉氏である。そしてオペラ演出家の岩田達宗氏が総合監修をする。2人は「全国で活躍されている多忙な皆さんが力を合わせてくださり、大変幸せ。感動していただける作品にします！」と力こぶ。また、「トリエンナーレ期間中なので現代美術などを見てホールに来ていただければ、抽象的な作品の楽しみ方も膨らむのでは」と語った。平松氏によるトークもある。両公演ともに大きな反響で「揺れて」ほしいし期待が膨らむ。(K)

公演案内

「静かなる大地」

9月30日(月) 19:00 ¥2,500 (自由席 500席限定)

●問い合わせ 052-678-5310

「光の記憶 第二章~KAGUYA~」

10月2日(水) 19:00 ¥3,000(指定席) ¥1,500(自由席)

公開ゲネプロ(作品のみ) 14:00 ¥1,000

●問い合わせ 050-3589-5898

いとしの サブカル

栄の怪人二十面相

—引っ越し魔・乱歩を育んだ街

小松 史生子 (こまつしょうこ)

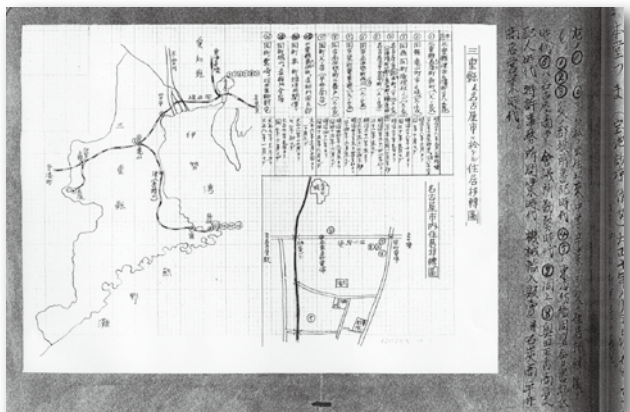
東京都生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程単位取得退学。金城学院大学文学部教授。著書に『乱歩と名古屋 ～地方都市モダニズムと探偵小説原風景』（風媒社）、共著に『探偵小説と日本近代』（青弓社）、編著に『東海の異才・奇人列伝』（風媒社）など。

※今号から新たに名古屋のサブカルチャー情報を紹介するコーナーを設けます。

引っ越しというものは、たいへんにエネルギーを使うものである。ある人は引っ越しを評して、「人生の三大苦の一つ」と呼んだ。新境地への期待が高まる反面、様々な面倒な手続きをこなさなければならず、荷ほどきも重労働だ。それなのに、そんな三大苦の一つをまるで趣味のように繰り返して飽きない人々もいる。名古屋で幼少期から思春期を過ごした江戸川乱歩もその一人だ。乱歩といえば、日本創作探偵小説の勃興期を支え、明智小五郎や怪人二十面相を生んだ偉大な作家であるが、彼は三重県名張市で生まれた後、3歳の頃に名古屋市に移り住み、18歳まで名古屋市内を転々と(なんと計6回も!)引っ越しして過ごした。その軌跡は、葛町の居宅を別にすれば、全て栄町交差点から名古屋駅を結ぶ広小路沿いに集中している。事業家であった父親が店舗を構える必要があったため、明治期の名古屋市内で唯一モダンな街並みが形成されていた広小路界隈が選ばれたわけだが、今現在でもこのあたりは名古屋文化の象徴たる街として、近年の名古屋駅周辺開発地区と並び、カルチャーの発信源として機能している。

名古屋駅開発地区との大きな違いは、広小路から栄

および久屋大通にかけて、超高層ビルが無いことが挙げられる。日本三大都市における目抜き街の繁華街としては、これは実は珍しいことである。久屋大通から栄に向かっての街並みを見渡すと、大都会にもかかわらず空が広く感じられる。大都会の真ん中に違いないのに、開放感に溢れ、ゴミゴミざわざわといった感じがせず、喧噪とは異なる風景が眺められる。これはもちろん、足下に存在している大地下街の影響が大きいだろうが、その地下街にしたところが、東京や大阪のものとは違い、天井が高く明るく広く清潔なのだ。この奇妙な空虚感、アンチミステリの傑作『虚無への供物』の作家・中井英夫がかつて指摘した、乱歩文学に見出せる原っぱ嗜好の現代都市版とでもいうべきものではなかろうか。都会の中の空き地や原っぱといったトポスに忽然と現れる怪人二十面相を乱歩は夢想した。私達は今、栄地区の奇妙に開けた明るい青空もとの空間に不思議なノスタルジーを覚えはしないか。振り向けば、銀色に輝くテレビ塔(周囲に高層ビルが無いため、なんと高く堂々と見えることか!)を背景に、まるで宇宙から降り立った空船のようなオアシス21の透明な威容が迫り来る。このファンタジーでSFをすら匂わせる光景は、おそらく他の都市ではなかなか出会えないものだろう。現在、このオアシス21では世界コスプレサミットというサブカルチャーの祭典が毎夏行われている。それに加え、今夏は参加型アトラクションとしての大がかりなお化け屋敷が久屋大通に小屋掛けされた。変装(という名のコスプレ)の名人・怪人二十面相を生みだし、八幡の藪知らず(明治～昭和にかけてのお化け屋敷の総称)を愛した乱歩が育った街は、現代に至るまでその面目を失ってはいないのだ。



江戸川乱歩『貼雑年譜』(講談社1989)

あいちのみんなもおでかけ。 トリエンナーレもおでかけ。 豊橋、知多、春日井、東栄町へ。

あいちトリエンナーレ2013では、メイン会場となる名古屋市・岡崎市以外の県内4カ所、豊橋市・知多市・春日井市・東栄町を会場に「モバイル・トリエンナーレ」を開催します。モバイル・トリエンナーレはその名の通り、この4市町を移動しながら週末だけ開催される小さな展覧会です。14名のアーティストによる、本展出品作とは異なる作品を展示し、あいちトリエンナーレ2013のエッセンスを紹介します。

それぞれの地域に根ざした、身近な場所で出会う現代アートの作品は、思っていたよりも親しみやすく、自分なりの想像や発見へとつながるかもしれません。モバイル・トリエンナーレがやってくる週末、家族やお友達とおでかけするような気軽さで、現代アートを見に足を運んでみませんか？

- 豊橋** 日時：8月23日(金)～25日(日)10時～19時
会場：穂の国とよはし芸術劇場プラット
- 知多** 日時：9月13日(金)～16日(月)9時～17時 ※入場は16時半まで
会場：知多市歴史民俗博物館
- 春日井** 日時：9月20日(金)～23日(月・祝)10時～20時 ※最終日は17時まで
会場：文化フォーラム春日井
- 東栄町** 日時：9月27日(金)～29日(日)9時～17時
会場：旧東部小学校

〈アーティスト〉

青木野枝、青野文昭、池田剛介、岡本信治郎、オノ・ヨーコ、
國府理、竹田尚史、丹羽良徳、彦坂尚嘉、藤森照信、
ヤノベケンジ、山下拓也、横山裕一、渡辺豪



| 問合せ | TEL052-971-6112

名古屋市東山荘が 登録有形文化財（建造物）に 登録されました

この度、東山荘は国の登録有形文化財（建造物）に登録されました。大正初年から10年ほどの年数をかけて、綿布商を営んでいた伊東信一氏により造られました。趣の異なる2つの茶室、格式のある書院座敷、洋風の応接間の構成で、数寄屋風と和洋折衷を活かした別荘建築が高く評価されました。庭園も見どころで各部屋から眺める庭木と自然樹林の景観は街中の喧騒を忘れさせてくれます。

名古屋市に寄贈されてからは、茶会や茶道の研鑽に使われるほか、最近では和の風情を求めてプライダルの前撮りなど、市民利用施設として活用しています。普段は庭園の見学のみ可能ですが、毎月開催している「市民茶会」の日は、建物の内部も見学できます。ぜひ東山荘へおいでください。



- | 問合せ | 東山荘 名古屋市瑞穂区初日町2丁目3番地
TEL・FAX 052-831-2672
- | 開館時間 | 9:00～16:30(庭園見学可)
- | 休館日 | 月曜日(祝休日の場合は翌平日)、年末年始

最高の瞬間を
鮮明な映像と音で
お届けします！
感動をハイビジョン・4K映像で表現

TVSnext

TVSnext 株式会社 ティーブイエスネクスト
〒460-0013 名古屋市中区上村津2丁目14番15号
TEL 052-322-6541 FAX 052-322-6639
http://www.tvs.co.jp

innovason Ether
LACOUSTICS ES
lake Sound
whirlwind

■ホール舞台音響設備 販売、設計、施工、保守

株式会社エーアンドブイ

〒464-0846
名古屋市中区千種区城木町二丁目98
TEL 052 (761) 5400
FAX 052 (761) 0909

デザイン・印刷/駒田印刷株式会社

舞台映像専科

ステージの感動を格調高い映像で追求します。
ハイビジョンで撮影し
ブルーレイディスクでお渡しします。

ビデオソフトの企画制作

有限会社 エーワン・ビデオ・システム
TEL(052)896-2256 FAX(052)896-4100

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

◎年間6,300円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、各所顧客DM、他に配布

MP MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ
〒464-0850 愛知県名古屋市中区千種区今池1-14-11 CASA LUZ302
TEL(052)735-3151 FAX(052)735-3152 E-mail: mpoffice@pa2.so-net.ne.jp

業務内容 ①舞台の企画・制作マネージメント ②イベントの企画制作
③芸術団体のコンサルティング ④舞台・イベントの運営